

松波むかし語り—ここに生き続けて その7

今回のお客様

社協委員も編み物も、みんな楽しくて！

花島千代子さん 84歳 4丁目

6～70代の人たちから“近所のおばちゃん”と慕われる花島さんの心には、今も助け合いの精神が生きているんですね。

“世間はけっして冷たくない。あったかい空気が残ってるじゃないですか”



花島さんは、戦後まもなく松波に越してこられた？
「そうです。昭和23年に、当時、日立の社宅だったいまの家に、長洲から嫁に来たんです。県営住宅はまだ松山で、裏のおばあちゃんといっしょに、七輪のたきつけにするため松ぼっくりや松葉を拾ったもんです」。今からはとても信じられませんね。「電話のあるのが、まだ北島ふとん屋さん一軒だけでしたから、長男が生まれるというのでお産婆さんと呼ぶのも北島さんまで電話を借りに行ったりしましたね。

その向かいの小野寺産婦人科医院の先代がお産婆さんで、むぎわら帽子をかぶって自転車でこの辺りを回っておられたんです」。戦後はどこへ行くにも自転車でしたもののね。「本町で焼け出されたものですから、おしめにする布一つにも不自由しましてね。よそのお宅にゆかたをほどいたおしめが干してあると、それがうらやましくて……。でも、どの家もものがなかった時代ですから、『お芋蒸かしたよー！』なんて声がかかったりもしました」。

花島さんは助け合いがあった時代を生きこられ、それがのちのいろいろな社会活動につながった？「子供会やPTAもやりましたが、いちばん長かったのは移動図書館の貸出係。月2回でしたが、友人と2人で30年やりましたか。本を借りに来られた方から『寒いんですねえ、ありがとうございました』なんて言われると、一日がうれしくて…。まだまだあります、花島さんは社会福祉協議会の役員を76歳まで続けられ、また公民館の2階で編み物のけいこをしているんです。今日は、お手製のすてきなベストが映えます。

長く続いたと言えば、公民館で20年近く続いた「松波歴史の会」のお世話役でもありますね？「講師の先生が私の女学校時代の恩師だったものですから、会計係のような役をしてくれました。でも、その竹下定蔵先生が101歳になられ、さすがに会を閉じさせていただきました」。



太巻き寿司の会（右から2人目）

花島さんはご主人が亡くなって一人暮らし。「でも近所の方が心配するから毎朝、きちんと雨戸を開けます。簡単なことが大事じゃないですか。世間は冷たくない、あったかい空気が残ってます」。それが持論のようです。いまま轟公民館で開かれるサークルに通い、「年金暮らしだけど、出かけるタクシー代だけは別にしている」と言われます。思わず“生涯現役がんばれ”と声をかけたくくなりました。